厚生連高岡病院

初期研修医　臨床教育レクチャー

2019

REPORT

CONTENTS

2019 年度

2019.04.10　横須賀海軍病院　Dr.Regine Remers
2019.04.13　湘南鎌倉総合病院　Dr.Joel Branch
2019.05.11　順天堂大学病院　Dr.Gautam Deshpande
2019.05.24　ハイズ株式会社代表　裵英洙先生
2019.05.29　エルゼビア・ジャパン　飯村傑先生
2019.06.05　横須賀海軍病院　Dr.Carrick Burns
2019.06.21　福井大学医学部附属病院　寺澤秀一先生
2019.07.05　杏林大学医学部付属病院　嶋崎鉄平先生
2019.07.19　神戸大学医学部附属病院　大路剛先生
2019.07.26　福井大学医学部附属病院　寺澤秀一先生
2019.09.04　エルゼビア・ジャパン　飯村傑先生
2019.09.18　帝京大学教授　渡部欣忍先生
2019.10.02　横須賀海軍病院　Dr.Melissa Stegner-Wilson
2019.11.01　聖路加国際病院　田巻弘道先生
2019.11.08　福井大学医学部附属病院　寺澤秀一先生
2019.11.27　エルゼビア・ジャパン　飯村傑先生
2019.11.30　湘南鎌倉総合病院　Dr.Joel Branch
2019.12.04　横須賀海軍病院　Dr.Courtney SAINT
2019.12.14　老年医学ワークショップ 2019in 富山
2020.01.11　順天堂大学病院　Dr.Gautam Deshpande
2020.01.24　東京ベイ・浦安市川医療センター　則末泰博先生
2020.02.05　昭和大学医学部　Dr.Kris “Siri” Siriratsivawong
2020.02.26　エルゼビア・ジャパン　飯村傑先生
2020.03.13　福井大学医学部附属病院　寺澤秀一先生

2019.04.10　横須賀海軍病院　Dr.Regine Remers

今回の研修医レクチャーは、Regine Remers先生による英語での神経診察のしかた、論理的な診断方法の組み立て方についてでした。Remers先生は神経内科でご活躍されておられる先生で、まだ神経診察に不安が残る私たちに笑顔で優しく指導してくださる素敵な先生でした。

今回のレクチャーは、まず代表の２人が前に出て皆の前で神経診察のデモンストレーションを行った後、症例の主訴からどのようなことを質問したいかということを英語で発表し、ディスカッション形式で診断まで至るといった流れのものでした。私自身、患者役として皆の前でデモンストレーションをする機会があったのですが、普段慣れない神経診察を、英語を用いて所見をとるといった流れに、医師役の研修医とともに苦戦してしまいました。普段から神経診察の意義を考えながら診察していくことが重要だと改めて感じました。

その後症例を用いてディスカッションを重ねていくのですが、その中で、先生の「神経学は一般内科と比べて、身体所見がより重要だ」という言葉が印象に残りました。私は画像診断でこの症例は診断できるだろうくらいの軽い考えだったのですが、身体所見をとり、論理的に障害部位を特定していくことの難しさや重要性といったものをこのレクチャーでは学ぶことができました。これからの時代は英語での診察はますます重要になってくるかと思います。こうした中で英語と神経診察を学ばせていただいたという経験を今後も生かすことができたらと考えています。

最後になりましたが、今回レクチャーをしていただいたRemers先生、このような機会を与えてくださった厚生連の先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

2019.04.13　湘南鎌倉総合病院　Dr.Joel Branch

今回は湘南鎌倉総合病院からJoel Branch先生にお越しいただきました。今回の臨床教育セミナーは症例検討会とBed Side Learning(BSL)でした。Joel Branch先生は総合診療科の先生で豊富な知識で様々な鑑別疾患をどんどん挙げていきました。

症例検討会では実際に研修医が経験した症例をJoel Branch先生と一緒に検討しました。症例検討会のテーマは「右下腹部痛」でした。私は医学部ではまずどのような検査をするかから考えるように教わっていましたが、Joel Branch先生はまず鑑別疾患から考えるように教えていただきました。今回の症例は右の尿路結石でした。まず、右の下腹部に何があるのかを考え、鑑別疾患を考えました。Major疾患の虫垂炎や大腸憩室炎、血管疾患、腸腰筋膿瘍などの疾患を鑑別に挙げていきました。

主訴が右下腹部と聞けば、まず画像診断を考えてしまうことをこの機会に改めたいと思いました。

Bed Side Learningでは、研修医の先生が英語で症例発表をして、Joel Branch先生がその患者さんを診察するものでした。Joel Branch先生は研修医みんなに聴診の機会をくださり、大変勉強となりました。診察ではどのように診察するべきかその場で教えて頂き、所見を共有していただきました。今回学んだ様々な技術や考え方は今後の診療で活かしたいと思います。また、英語でのレクチャーは大変刺激になります。毎回英語に触れることで苦手意識を無くしていきたいと思います。

今回このような機会を設けていただけたこと、わざわざ湘南鎌倉から当院まで足を運んで下さったJoel Branch先生に感謝申し上げます。本当に有難うございました。

2019.05.11　順天堂大学病院　Dr.Gautam Deshpande

今回は順天堂大学病院から総合診療科のGautam Deshpande先生にお越しいただきました。今回のレクチャーは症例検討会として研修医の先生が実際に経験した症例をGautam Deshpande先生と一緒に検討しました。

症例検討会の症例は「48歳男性の咳嗽と発熱」でした。まずは現病歴の前に思い当たる鑑別疾患を皆で挙げていき、次に上がった疾患ごとに問診として何を聞けばよいかを考えていきました。そして患者さんの現病歴と症状が明かされ、挙げた鑑別の中から疑わしい疾患をGautam先生と話し合いながら検討していきました。今回の症例では肺に空洞があることがわかり、肺膿瘍、結核、真菌、肺癌などが疑わしい疾患として挙げられました。問診では48歳の独身男性ではSTIのリスクについて聴取することの重要性や、身体所見の場面では特に聴診の方法について教えて いただきました。私は肺炎ではcoarse cracklesが聞こえるという知識しかありませんでしたが、先生は肺炎のある部位では患者に「イー」と言ってもらうとその部位では「アー」と聞こえることや、肺に空洞を形成する疾患では患者にささやき声を発してもらうと空洞の部位だけ大きく聞こえることなど、先生の経験を元に実臨床で役立つ知識を教えていただきました。

そして診断のためにはどのような検査が必要か討論しました。実際の診断は肺膿瘍であったことがわかり、その後の治療や原因菌について先生と共に考察を行いました。今回のレクチャーでは診断の手がかりとなる患者の重要な訴えを聞き逃してしまうことがあるため、医師が鑑別を考えながら問診と身体所見を根気強くとっていくこと、順序立てて鑑別、診察、検査を考えていくことの重要性をGautam先生のお話から学びました。

今回は外来で比較的よく目にする咳嗽と発熱についての症例検討であり、これからの研修で活かしていけることばかりでした。Gautam先生は英語の苦手な私にも聞き取りやすい英語で、日本語も交えながらわかりやすくお話していただき、大変勉強になりました。今回このような機会を設けていただけたこと、お忙しい中当院まで足を運んでくださったGautam Deshpande先生に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2019.05.24　ハイズ株式会社　代表　裵英洙先生

今回のレクチャーはハイズ株式会社代表の裵英洙先生をお招きし、“若手医師が知っておきたい医療界の事情”というテーマで、現在の医療界・今後の医療界が抱える問題、マネジメント力について教えて頂きました。

まず、現在の日本医療を取り巻く様々な”数字”を示して、数字の意味と今後その数字がどのように変化していき、今後の医療界に影響していくのかを教えていただきました。グラフを用いて、少子高齢化による医療費の膨張・診療科における医師数の偏在・病院競争が激化していることなどを解説していただき、未来の日本医療界が抱える問題について考えさせられました。

次に、今後の医療界にどういう人材が求められているのかを教えていただきました。仕事の効率化が重視されてきている中で、多職種をまとめ、仕事を分担できる、”統合力・洞察力・戦略力”を持った人材が必要とされていることを知りました。また、人を動かす能力”交渉術”が重要であることを学びました。

この交渉術は研修医が身に付けるスキルとしても重要であり、例として”上級医へのプレゼンテーション”を挙げられました。上級医へのプレゼンテーションは、ただ患者の内容を伝えるのではなく、どうしたら自分の考えに賛同してもらえるか交渉する手段であるという事を教えていただきました。

今回のレクチャーを通して、今後の医師キャリアを考える良い機会となりました。研修医2年間でただ漫然と知識・手技を身に付けるだけでなく、研修医のうちから多職種のリーダーとしての自覚を持って、”マネジメント力“を養っていかなければいけないと思いました。

最後になりましたが、お忙しい中、貴重なお話を聞かせていただいた裵先生に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2019.05.29　エルゼビア・ジャパン　飯村傑先生

今回のレクチャーでは、エルゼビアジャパンのChief Medical Officer、今日の臨床サポート 編集長である飯村傑先生をお招きし、“医療の正しさの根拠となる研究・論文からの情報の抽出”をテーマとして、主に英語で書かれた医学論文の読み方について教えて頂きました。

まず、医学論文から研究の目的や対象の基準、介入方法、比較対象などの概要を定式化することを教えて頂きました。論文の情報から何を知る必要があり、知りたい情報がどの部分に載っているかなど、医学論文の基本的な書き方をもとに指導していただきました。

次にその医学論文の結果は信頼できるのか、その結果が何かについて学びました。

今回参考にした医学論文では、ある治療とほかの既存の治療を比較しており、治療効果がどうなのかを実際に計算し、その結果をひとつの症例に当てはめて、患者にとって利益になるか等、医学論文から抽出した情報をどのように利用するか、についてまで教えて頂きました。レクチャーを通して、ある疾患に対する治療方法を検索する際に、英語の医学論文を漠然と読むのではなく、必要な情報を抽出・評価し、実臨床に用いることで、正しくEBMを実践できるように努めなければならないと思いました。

最後になりましたが、お忙しい中、貴重なお話を聞かせていただいた飯村傑先生に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2019.06.05　横須賀海軍病院　Dr.Carrick Burns

この度は、横須賀海軍病院よりDr. Carrick Burns先生にお越しいただきレクチャーをしていただきました。

皮膚症状からスタートする問診・検査・診断についてグループごとにディスカッションを行いました。英語が得意でない私はなかなかに苦労しましたが、少しでも自分の意見を言おうと努めました。医学英語に触れることのできる機会を頂けることはとても貴重なことだと実感しています。

私がこの度のレクチャーで最も勉強になったことは、Case Summaryを1.2文でまとめることです。正確に・明白に・適切なプレゼンテーションが求められるのでとても難しく感じておりました。4症例ありましたが、いいトレーニングをさせて頂いたと感じております。

また、皮膚科という領域に関して私は知識が豊富ではありません。ですが、先生がcolor/flat or raise/sizeに着目して皮膚症状を判別することを教えてくださいました。今後の救急対応の際にはこの経験を生かしていこうと思っております。

最後になりましたが、お忙しい中、貴重なお話を聞かせていただいたDr. Carrick Burns 先生に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2019.06.21　福井大学医学部附属病院　寺澤秀一先生

今回は福井大学地域医療推進講座教授、寺澤秀一先生にお越しいただき症例検討会として2症例についてご講義いただき、研修医一同とともに検討させていただきました。

1症例目は上肢の挫創で対応に難渋した症例でした。診察や説明の仕方、順序、メディア力についてご講義していただき、診察、説明の途中で患者さんが怒り出した場合にどのように対処するか、上級医にどのタイミングで来てもらうかということやメディア力の違いについて聞かせていただき、実践的な対応の仕方について学ぶことができました。寺澤先生ご自身による患者さんのクオリティの高いモノマネを交えながらの講義で具体的にその場面をイメージしながら考えることができました。

若い時はメディア力が低いため、メディア力の高い上級医から説明してもらう事で同じ説明でも重みが変わることを学びました。

2症例目は関節痛を伴う発熱を主訴に来院された症例でした。今回の症例の患者さんはアトピー性皮膚炎の既往のある方で、そのような方で、水泡の集積を伴う発疹が上半身に出現し、発熱がみられるような場合はカポジ水痘様発疹に注意が必要であるという事を学びました。アトピー性皮膚炎の増悪と誤認してステロイド軟膏を処方すると更に悪化してしまうためです。間違いやすい疾患に関しては頭に入れておき、特に注意して鑑別していくことが重要であると学びました。このように患者さんの診察所見や検査結果などから話を広げる形で、その解釈の仕方や鑑別すべき疾患などを研修医一同で考えながら、今度実際に自分自身が似た症例に出会ったときにどのように対処すべきかイメージできるようなレクチャーだったと思います。

最後になりましたが、今回レクチャーして頂いた寺澤先生、企画して下さった厚生連の先生方に感謝申し上げます。

2019.07.05　杏林大学医学部付属病院　嶋崎鉄平先生

今回は杏林大学医学部附属病院 感染症科の嶋崎鉄兵先生にお越しいただき、抗菌薬の適正使用や感染症の考え方について実際の臨床症例に触れながらご講義いただきました。

まずは、抗菌薬を適正使用するための6Dについてお話いただきました。私達が患者さんを治療するためにはまず診断(Diagnosis)が欠けてはなりませんが、実際にしっかりと診断できているか改めて考えてみると、自分ではなかなか出来ていないと痛感しました。抗菌薬をやみくもに使ってしまうようなことは今までも何度か経験しており、苦い思いをしてきています。感染が起こるためにはまずその原因を探るべきであり、例として出していただいた大腸癌を契機とした腸球菌による敗血症のように、「なぜそうなったのか」と疑問を持つことができるよう常に目を開いておきたいと思いました。

次に、血液培養が如何に大切であるか、培養を採るタイミングや考え方からお話頂きました。悪寒戦慄、発熱以外にも血液培養を考えるべきタイミングは沢山ありますが、今後は臆せず血液培養を選ぶことができるようになったと思います。最後に提示いただいたレミエール症候群の例はどのように考えるか非常に難しい症例でしたが、問診を丁寧に行い情報を整理する他に、血液培養をとっておくことで診断にたどり着けたというものでした。

そのひとつの症例についても、旅行者の感染症についての考え方をはじめとし、診断に至る流れに沿って散りばめられたエッセンスを学ぶことができ大変勉強になりました。嶋崎先生の引き出しの多さに驚きながらも、私も多くの症例を経験して、学んだことを自由に引き出していけるようになりたいと思いました。

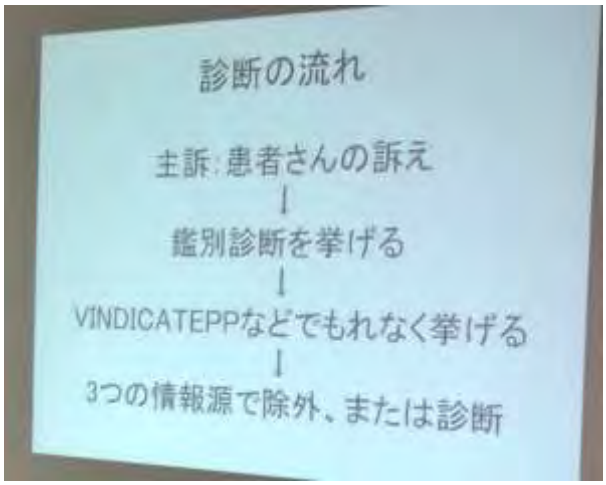
最後になりますが、お忙しい中富山にいらしてお話いただいた嶋崎先生、このようなレクチャーを企画して下さった先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

2019.07.19　神戸大学医学部附属病院　大路剛先生

今回は神戸大学医学部附属病院　感染症科の大路剛先生にお越しいただき、感染症の診断・考え方についてご講義いただきました。

まずは鑑別診断をあげるための患者情報として、①病歴・自覚症状、②身体所見、③臨床検査・画像検査・生理検査、の３つのトライアングルについてお話頂きました。全ての可能性を考慮して全身精査をするという方法もありますが、実際の現場での診察は限られた時間で行う必要があり、この３つのトライアングルの情報源から鑑別診断をあげ、絞り込む力が必要とされます。だからこそ、患者さんからできる限り多くの病歴を聞き出し、その情報に対し常に他覚的であることが大切だということを改めて学びました。

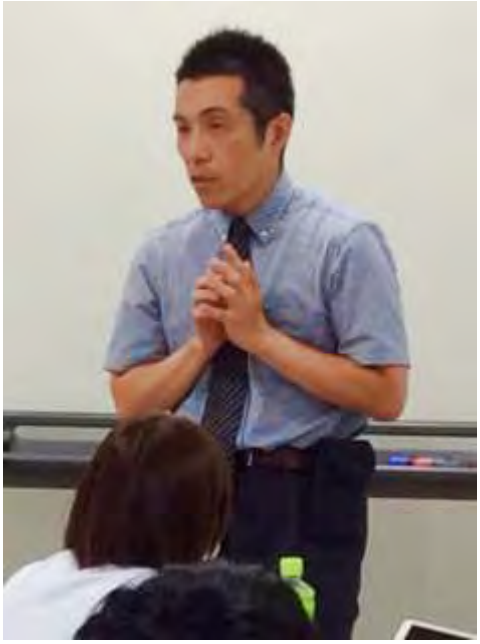
また、発熱の鑑別として感染7症、自己免疫・自己炎症、悪性腫瘍、血栓と骨折の４つについて教えていただきました。特に多くみられる感染症についてディスカッションしましたが、呼吸器感染において中耳と副鼻腔・喉はつながっているから起炎菌も似たものになる、ということや胆嚢炎の原因として自律神経異常(軸索損傷や外傷によるもの)による胆管閉塞が挙げられるというのはなかなか見落としがちな点で、機序からしっかりと理解して診断を考えなければいけないと思いました。



自己免疫についてのお話もしてくださり、国試でも出てきた好中球・細胞性免疫・液性免疫について様々な例を挙げながら説明して下さいました。

正直、学生時代は免疫の分野はとても苦手でどれが何かよくわかっていませんでしたが、今回の講義を通してそれぞれに対してどのような原因があり、どんな特徴があるのか、などを学ぶことができ、免疫について以前よりも理解できたように思えます。

最後に、お忙しいところはるばる富山にいらして講義してくださった大路先生、このようなレクチャーを企画してくださった方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。



2019.07.26　福井大学医学部附属病院　寺澤秀一先生

今回は、福井大学地域医療推進講座教授、寺澤秀一先生にお越しいただきました。研修医が症例提示を行い、それに沿ったテーマについてご講義いただきました。

今回のレクチャーで印象に残ったのは、「聞きなれぬ　薬はすべて　確かめる」という川柳です。救急外来では、多数の内服薬のある患者さんを診察することも少なくありませんが、それらがどのような作用の薬なのか理解することで、起こりうる有害事象を予想することができます。

抗凝固薬を飲んでいれば出血のリスクを考える、NSAIDsを飲んでいれば胃腸障害を考える、など私たちが普段から意識しているものもあります。しかし、薬には数多くの種類があり、聞きなれないものに関しては、その副作用はもちろん、作用さえ知らないわけですから、私たちは多くの情報を失ってしまうことになります。

「内服薬から既往を想像すること」「内服薬から訴えを予想すること」が非常に重要で意味のあることだと改めて認識することができました。

また、私たちには多くの同期や先輩がいますが、その中での情報の共有が重要であることを教えていただきました。ひとりが回ることのできる科は1か月にひとつですが、そこで経験したことをみんなと共有することで、より密度の高い研修ができ、今後自分が新しい科について学ぶ際の糧とすることができます。この恵まれた環境であるからこそできることだと感じました。

今回の寺澤先生のレクチャーでは、疾患や検査、治療に関する知識はもちろんのこと、診療に向かう姿勢や、同期や先輩との関わりの重要性についても気づくことができました。

今後、実際に診療にあたる際には、知らないことはしっかりと調べること、自分が経験したことは積極的に共有していくことを大切にしていきたいと思います。

最後に、今回レクチャーしてくださった寺澤先生、企画してくださった厚生連の先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2019.09.04　エルゼビア・ジャパン　飯村傑先生

今回は、エルゼビアジャパンのChief Medical Officer、今日の臨床サポート編集長である飯村傑先生のレクチャーでした。飯村先生のレクチャーは今年度に入り2回目となります。

「感染性心内膜炎の患者が抗菌薬治療中に帰宅を希望した際に、抗菌薬を経口に変えて帰宅させることは可能だろうか」という臨床的疑問を例として、実際の英語論文を読んでいこうというものでした。論文は、感染性心内膜炎に対する抗菌薬を経静脈的投与で継続した場合と経口投与に変更した場合で検討したものでした。前回教えて頂いた論文を読み解いていく上でのポイントを確認しながら、論文を解釈していくところから始まりました。そして、今回は解析方法による結果の解釈の違いや、それによって変わってくる論文の信憑性の違いや、統計学的意義と臨床学的意義を区別しながら読み進めていくことの大切さを教えていただきました。

最初は、慣れない英語論文を前に歯が立たず、飯村先生から教えていただいた論文を読む上でのポイントを理解する事だけで精一杯でした。しかし、今回は前回学んだ事を踏まえながらもっと論文の内容について皆で議論、理解をする事ができたと思います。論文をただ漫然と読むのではなく、要点をしっかり押さえる事。結果や考察を鵜呑みにせずに論文や研究自体の信憑性を評価する事。数値や統計解析のロジックと、統計学的意義と臨床的意義をしっかり区別しながら読む事。

など、先生のお話を聞けば聞くほど新しい発見があり、英語論文への抵抗が少しずつ薄れてきているような印象を受けました。どんな先生の講演やレクチャーでも１度で全てを自分のものにすることはできません。やはり、同じ先生に何度もご講演いただけるというのは貴重なことであり、自分を成長させる事が出来ると感じます。

飯村先生はもちろん、この様な機会を与えてくださった厚生連高岡病院の先生方にも感謝しています。ありがとうございました。あと２回の飯村先生のレクチャーも楽しみです。

2019.09.18　帝京大学　教授　渡部欣忍先生

今回は、帝京大学整形外科教授の渡部欣忍先生にお越しいただきました。渡部先生は整形外科医として臨床分野で活躍されているのに加え、プレゼンテーションの効果的な方法をまとめた本を出版されるなど、他人に分かりやすく伝えることについても熱心に研究・教育されている先生です。今回は主に他人に伝わるプレゼンテーションの作り方、論文の書き方をご指導いただきました。

レクチャーの内容は今まで聞いたことがないような驚きの連続でしたが、中でもパワーポイントを作るうえで、他の人に興味を持ってもらうためにデザインや字の大きさ、フォントにまで気を配ることが重要であるという話には目から鱗が落ちるようでした。私が普段スライドを作るときは何が必要で何が不必要かを取捨選択できていないため、全部を記載してしまうことが多々ありました。

しかし、先生が例として示されたスライドでは、これまでに見たことのないような文字の大きさであり、初めは驚きの方が大きかったのですが、必要なことを文字の大きさやフォントなどで強調する、不必要なものは喋ることで補う、といったことだけで興味がひきつけられるスライドとなっていました。その他さまざまな工夫を伝授いただき、人に伝えるということに大変興味を持ちました。先生の著書、『あなたのプレゼン誰も聞いてませんよ！』の購入を検討中です。

今回のレクチャーはあまり人から教えてもらえる分野ではなく、なんとなくで済ませていた気がします。そうしたところを分かりやすく教えていただけたということは非常に貴重な経験でした。お忙しい中、私達にレクチャーをしてくださった先生に改めて感謝の気持ちを伝えたいと思っております。大変ありがとうございました。

2019.10.02　横須賀海軍病院　Dr.Melissa Stegner-Wilson

この度は、横須賀海軍病院よりDr. Melissa Stegner-Wilson先生にお越しいただき、英語による耳鼻科領域の診察、検査、診断などについてレクチャーをしていただきました。

耳鼻科領域の英語は正直あまり知識がなく、レクチャーが始まる前まではほとんど理解できないのではないかと不安でしたが、レクチャーの導入として耳鼻科領域の解剖や基本的な知識について英語で分かりやすく教えていただきました。最初に耳鼻科に関わる解剖や基本的な知識を確認できたことで、その後の症例検討でも理解が深まりとても有意義な講義になったと感じています。

救急外来でも耳鼻科領域の主訴で来られる患者は決して少なくありません。横須賀海軍病院からいらっしゃる先生がいつもおっしゃっているのは、問診と身体所見からまずは鑑別疾患を考え、その上で診断のためにはどのような検査が必要かを考えるということであり、今回の症例検討でもそういった診断に至るプロセスに則って診察をしていくことが大切であると改めて認識させられました。

そのほかRinne試験やWeber試験、オージオグラム、ティンパノメトリーなど耳鼻科領域特有の検査についても英語で分かりやすく教えていただきました。

耳鼻科のレクチャーというのはこれまであまりなかったのですが、非常に興味深く楽しかったです。今回のレクチャーの経験を今後の臨床でも生かしていきたいと思います。最後に、今回のレクチャーを企画していただいた先生方、そしてお忙しい中当院まで来てくださったMelissa先生にこの場を借りて感謝申し上げます。

2019.11.01　聖路加国際病院　田巻弘道先生

この度は聖路加病院リウマチ膠原病センターの田巻先生にお越しいただき、血管炎のレクチャーをしていただきました。まずは、血管炎の一般的なレクチャーしていただき、そのあとに先ほどのレクチャーで学んだことを思い返しながら、田巻先生が実際に経験した症例を提示していただき、グループでの症例検討を行いました。前半で血管炎の一般的な知識を確認できたので、症例検討での理解が深まり、議論も白熱し、大変有意義な時間になったと思います。

症例は、結節性多発動脈炎の診断をされているが、セカンドオピニオンで田巻先生を受診した症例でした。小血管炎の検査所見が出ているにも関わらず、大血管炎のような臨床所見が出ており、診断に難渋していた症例でした。一つ一つの検査所見をしっかり考察する機会を設けていただき、大変勉強になりました。最終診断は血管肉腫と、誰も頭をかすめもしなかった診断でした。やはり、実臨床は教科書通りにはいかないんだと痛感しました。

私たちは一度診断をつけてしまったら、その診断からなかなか離れられず、間違った治療を続けてしまうことも多々あります。田巻先生のように常に他人や自分の診断に疑いを向けることが大切なんだと学びました。今回学んだことを明日からの臨床に活かしたいと思います。

田巻先生には何度も当院にお越しいただいており、研修医レクチャーをしていただいています。大変有意義な時間を過ごすことができています。今回のレクチャーを企画していただいた当院の先生方、そしてお忙しい中当院まで来てくださった田巻先生にこの場を借りて感謝申し上げます。

2019.11.08　福井大学医学部附属病院　寺澤秀一先生

今回は福井大学地域医療推進講座教授、寺澤秀一先生にお越しいただき症例検討会として2症例についてご講義いただき、研修医一同とともに検討させていただきました。

1例目は脳梗塞の症例でした。意識状態がやや悪い方で、話の内容が不明確な方に対しては、学生時代の精神科受診歴などを問診で確認する必要があるが、その質問の仕方には注意が必要であることを学びました。

多くの夫婦はそのような精神疾患やてんかんの既往については夫婦間、または家族間で隠している可能性があり、家族が同席している場合は、席を外してもらった上で質問するなど本人が答えやすいように配慮する必要があると教わりました。救急外来では病歴や既往歴について素早く情報収集をすることに集中するあまり患者の感情に配慮することがおろそかになりやすいと考えられるため、このような細かい配慮もこれからの診察に活かしたいと思いました。

2例目は上腹部痛を主訴にした方でした。この症例で印象に残ったところは、自発痛、圧痛、反跳痛の有無、などの所見を正確に記載することの重要性を教えて頂いたことと、圧痛のある所にはその部位の臓器に何かしらの問題があるという言葉です。このような考えがベースにあることで、その部分の鑑別疾患を考え、必要な検査を考えることができると思います。

また単純CTと造影CTの取り方の実際など実際の業務の中でつまずく点についても解説いただき、次からの救急外来で活用できる知識とすることができたと思います。

最後になりましたが、今回レクチャーして頂いた寺澤先生、企画して下さった厚生連の先生方に感謝申し上げます。

2019.11.27　エルゼビア・ジャパン　飯村傑先生

今回は、エルゼビアジャパンのChief Medical Officer、今日の臨床サポート編集長である飯村傑先生のレクチャーでした。飯村先生のレクチャーは今年に入り3回目で、今年最後のレクチャーとなりました。

今回は「βブロッカーを内服されている患者が急性心不全で救急搬送されてきた場合、βブロッカーを継続するか、中止するか」という臨床的疑問を例として、実際の英語論文を読み、治療方針について議論しました。論文は、急性心不全患者でβブロッカーを継続もしくは中断した場合の死亡リスク・再入院率等をコホート研究にて比較検討したものでした。これまでのレクチャーで教えて頂いた論文を読み解いていく上でのポイントを確認しながら、論文を解釈していくところから始まりました。また、今回は前回まで扱っていたランダム化比較試験のものと違い、プロペンシティスコアを用いた比較群の均等化やハザード比を用いた解釈方法に関して具体例を交えながら分かりやすく教えていただきました

前回までに学んだ事を踏まえ、チームで話し合いながら論文を読み進め、対象の選択方法・研究デザイン・結果に至るまでのプロセスで問題点がないかを議論しました。今回の研究の信憑性は高いと断言できるものではありませんでしたが、βブロッカーを継続した方で予後が良いという共通認識を研修医全体で持つことが出来ました。

計3回のレクチャーで英語論文の読み方が以前に比べ、身についてきたことを今回のレクチャーで実感することが出来ました。

最後になりましたが、お忙しい中、当院まで来てくださった飯村傑先生、レクチャーを企画していただいた当院の先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2019.11.30　湘南鎌倉総合病院　Dr.Joel Branch

本日は湘南鎌倉病院よりブランチ先生にお越しいただきました。ブランチ先生のレクチャーを受けるのは２回目でありましたが、私が強く感じたのは「身体診察はすごい！」ということです。

今回はシャーロック・ホームズベッドサイド回診という新しいスタイルでの回診でした。ブランチ先生は患者さんの情報を何も知らされないまま、カンファレンス室に入ってこられた患者さんの診察を始める、というものです。得られた身体所見より、患者さんが化学療法中であること、既往にCOPD, 高脂血症、糖尿病があることなどを次々に当てていかれる姿はとても衝撃的でした。また、実際の患者さんの身体診察を通じて、身体診察のポイント、コツなどをわかりやすく説明していただきました。腱反射のコツや、肝臓辺縁の診察の仕方、Murphy徴候の取り方など、すぐに実践できる技術をわかりやすく説明いただきました。

私の救急外来での診療を振り返ると、身体診察に自信が持てず、採血・画像診断といった検査に診断を頼りがちでした。身体診察から考えるアセスメントをしっかりできれば、余計な検査は減らせて効率化が図れ、患者さんの負担も軽減できると思います。今回、ブランチ先生に教えていただいた身体診察の技術・考え方を実践していきたいと考えております。

本日はお忙しい中、貴重なレクチャーをしていただきましてありがとうございました。

2019.12.04　横須賀海軍病院　Dr.Courtney SAINT

今回は家庭医療専門医のDr. Courtney Saintのレクチャーをしていただきました。

テーマは身体所見の重要性について、特に今回は頭頸部を中心に、症例形式で勉強させていただきました。部位別の進行は頭の切り替えがとてもしやすく、さらに先に基本事項を教えていただくことで、症例の問題について話し合う際に着目すべき点が明確になりました。

症例は鑑別疾患、次に行う検査、または治療についてクイズ形式で進行してくださり、レクチャーに積極的に参加することができました。

普段の救急外来での診察で抜けてしまいがちな所見、各部位で見落としてはいけない所見や、治療（ただ投与する薬剤を聞かれるだけでなく実践的な治療期間についてまで）を確認することができました。特に印象に残っている症例が２例ありました。PCOSによる男性化徴候を認めた女性でのスピロノラクトン、メトホルミンの使用についてです。実臨床でもよく見かける薬剤の意外な適応について勉強することができました。もう１例は新生児での耳の観察の重要性についてです。耳と腎臓の発生時期が同時期であり、耳瘻孔などの耳の異常という身体所見が、腎臓の異常も見つけられる可能性があることを知ることができました。

自分の英語力不足を痛感する1日でしたが、Dr. Courtneyが平易な英語に言い換えてくださったり、Google翻訳や先輩研修医に助けられたりと多くの支えによって今回のレクチャーを実臨床に還元できるような実りあるものにできたと思っております。

また、英語力に関しても研修医一同さらに精進していきたいと思います。

最後になりましたが、お忙しい中お時間を割いて当院にお越しいただいたDr. Courtney Saint、レクチャーを企画していただいた当院の先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2019.12.14　老年医学ワークショップ　2019in富山

今回は老年医学について関口先生、狩野先生、許先生、湯浅先生にレクチャーしていただきました。テーマは認知症・せん妄についてです。

入院患者を診ていると必ずと言っていいほど遭遇するせん妄。今まではなんとなくで対応していた研修医が数多いと思いますが、今回せん妄の定義や診断・要因について一から学ぶことで適切な対応・治療を知ることができました。リスクの一つ一つを洗い出してそれを改善していくことがせん妄治療の一番の近道だということを身に染みて感じました。

次に普段数多く接している認知症に関してですが、診断基準や進行度・余命について学ぶことでいかに認知症が生命予後を悪くするのかを考えさせられる良い機会となりました。

救急外来に訪れる患者で主訴がはっきせず分からないというのは自分も多々経験したことがありましたが、その裏に隠れる異常を見つけ出すことが私たちのすべきことであり、そのための診察のポイントなども教えていただいたので、今後の診察に生かしていきたいと思います。

また最後に、認知症患者の終末期ケアについて自分が担当医役となって患者の家族役、看護師役の方と話し合いをしていくというロールプレイをしましたが、認知症という病気について説明する難しさや選択肢を提示する難しさを実感したとともに、患者本人とのストーリーを深く掘り下げることで本人の意思を家族とともに探し出すことの大切さを体感しました。そのうえで患者本人の生き方・価値観からゴールを設定し、そのゴールを家族と共有しその後の各論と決めるという湯浅先生のこの言葉は、認知症患者の終末期ケアだけでなくその他でも通ずるものであり 深く心に残りました。

最後になりましたが、ご多忙の中レクチャーをして下さった先生方、ワークショップのため当院まで足を運んでくださったその他多くの先生方、企画してくださった当院の先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2020.01.11　順天堂大学病院　Dr.Gautam Deshpande

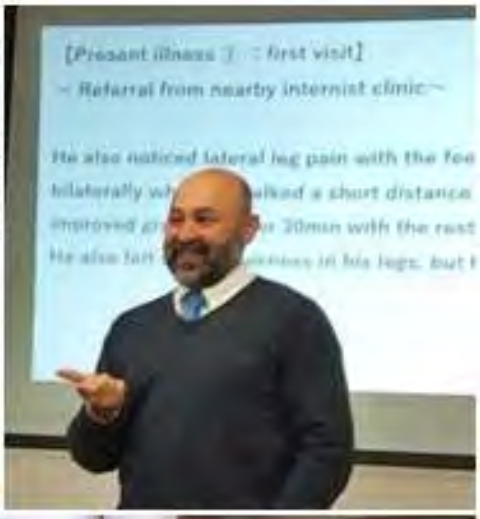
本日は順天堂大学病院から総合診療科のGautam Deshpande先生にお越しいただきました。今回のレクチャーは症例検討会として、研修医が実際に経験した症例をGautam先生と一緒に検討しました。

症例検討会の症例は「72歳男性の全身倦怠感、頚部痛」でした。まずは全身倦怠感という主訴から思い当たる鑑別疾患を皆で挙げて、挙がった疾患ごとに問診として何を聞けばよいかを考えました。そして、その症例の現病歴と症状が明かされ、挙げた鑑別疾患の中から疑わしい疾患をGautam先生と話し合いながら検討しました。

今回の症例では、画像所見では異常を指摘されていませんが、経過や採血結果から感染症が疑われ、抗菌薬による治療が開始されました。しかし、抗菌薬投与で改善せず、検尿異常および腎機能障害が出現したため、抗体検査を行ったところMPO-ANCA陽性が判明し、顕微鏡的多発血管炎の診断に至りました。

今回の症例を通して、診断の決め手となるような重要な身体所見や検査所見は患者本人が病院に来た時にはないケースもあること、また診断において先入観を持たず、広い視野を持って、様々な可能性をしっかり吟味する重要性を学びました。

血管炎のような疾患は、私たちの日常診療で遭遇することは多くはないですが、全身倦怠感を主訴に来院してくる患者さんは少なくなく、診断の手順や考え方はこれからの研修で活用していきたいと思います。今回お忙しい中当院まで足を運んでくださり、このような機会を設けていただいたGautam Deshpande先生に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



2020.01.24　東京ベイ・浦安市川医療センター　則末泰博先生

今回は、東京ベイ・浦安市川医療センターの則末泰博先生にお越しいただき、集中治療病棟でのプレゼンテーションの仕方、終末期医療の考え方について講演いただきました。

私自身は、以前からプレゼンテーションに対し苦手意識が強く、実際に話す際にもうまく要点を伝えられないもどかしさを感じることが多々ありました。

今回の則末先生のお話では、話す順番というプレゼンテーションの第一歩から、各症候をどのように評価するかという各論まで、丁寧にご説明いただきました。その中でも、話す上で重要なことと簡単にまとめてしまってもよいことを、どのように考え、区別するかを教えていただいたことが印象に残っています。このレクチャー以降、集中治療病棟でのプレゼンテーションは、以前と比較すると要点を意識したものに近づけたのではないかと感じています。

後半は、終末期の患者への関わり方についてお話いただきました。私たち医療者が、最期の時間に提供できることはどのようなことなのかを具体的に考える機会を与えていただきました。認知症患者における意思決定の問題など、今後自分たちが直面するであろう問題について理解を深めることができました。

お話の中で特に印象に残ったのは、患者や家族に選択をせまる場面で、どのように選択肢を提示するかということです。例えとして、我々がカレー専門店で細かなスパイスの選択を迫られても難しいのと同様に、患者・患者家族にとっては細かな医療処置の選択をすることは難しいということを改めて実感しました。

選択肢を提示する際には、受け取り側が理解しやすいように、そして、メリット・デメリットを深く理解した上で、偏った考えを押し付けることのないように気をつけていきたいと感じました。

私たちは、このレクチャーを通して実践的な学びを多く得ることができました。今回お忙しい中当院まで足を運んでくださり、このような機会を設けていただいた則末先生に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

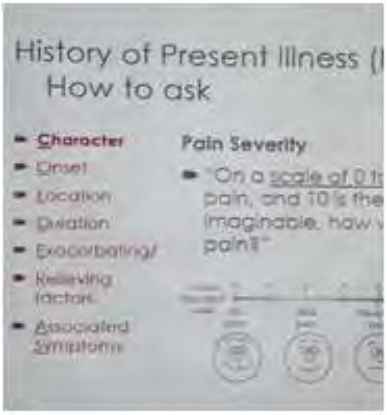
2020.02.05　昭和大学医学部　Dr.Kris “Siri” Siriratsivawong

本日は、昭和大学よりKris Siriratsivawong先生にお越しいただき、英語での問診・身体診察についてレクチャーをしていただきました。Kris先生は、以前にも当院でレクチャーをしていただいており、また、先日行われた全国厚生連大会でも英語の診察について教えていただきました。

今回は、「胸痛」・「腹痛」のテーマについてのレクチャーでした。はじめに、私たち医療従事者の使う単語と、一般の方々が聞きなじみのある単語は必ずしも一致しないということを学びました。日本語では何となく当たり前のことのように感じますが、英語で問診を取る際もこうしたことに気を付けなければ正確に情報を得ることができない可能性があることを改めて実感しました。その後、それぞれについて症例を用いて英語でロールプレイングをしました。慣れない英語での問診に苦戦しながらも、尋ねるポイントを意識して情報をとることができました。その後鑑別診断を挙げる場面では、日本語でも難しい作業を英語で行うということで大変なものだったとは思いますが、何度もの英語でのレクチャーを通じて慣れてきた実感がわいてきた気がします。

そして今回は医学的な知識はもちろんのこと、ベッドサイドでのマナーや問診中の相槌ちなど、より実践的な英語の使用についても学ぶことができました。救急外来等で外国人の方が来られた際にも役立つ情報であり、今後活かしていきたいと思いました。

「英語の講義」とだけ聞くとどうしても身構えてしまうようなものですが、Kris先生のレクチャーは、内容はもちろんのこと、ご本人のキャラクターもありとても面白く、またためになるものでした。英語での診察に少しでも自信が持てるように、今後も積極的に英語でのレクチャーに取り組んでいきたいと思います。お忙しい中私たちに対して興味深いレクチャーをしていただき、誠にありがとうございました。



2020.02.26　エルゼビア・ジャパン　飯村傑先生

今回は、エルゼビアジャパンのChief Medical Officer、今日の臨床サポート編集長である飯村傑先生のレクチャーでした。飯村先生には一年を通して様々な英語論文の読み方を教えていただきました。今回は今年度最後のレクチャーということで、今まで学んだことを生かしつつ、チームで話し合いながら英語論文を読み進めていきました。

今回は「ココナッツオイルの摂取が心血管系疾患のリスクファクターに与える影響について」というテーマについてのシステマチックレビューとメタ解析の英語論文を読み進めていきました。論文はココナッツオイルがコレステロールを上昇させると考えられている一方で、心血管疾患のリスクファクターに良い影響を与えるともいわれており、実際に他の調理油について行われた様々な臨床試験データをメタ解析し、ココナッツオイルの脂質やその他リスクファクターに与える影響を比較検討したものでした。これまでのレクチャーで学んだ論文を読み解いていくプロセスを確認しながら、チームで話し合い論文の解釈を深めていきました。

一般的にメタ解析はエビデンスレベルが一番高いというイメージを持っていましたが、実際に論文を読む前と後ではイメージが変わりました。今までのレクチャーでもそうだったのですが、ただ漫然と論文を読んで判断するのではなく、解析に使用された各研究データの要素を吟味し、どういった方法で解析してどのような結果が出たかを理解しながら読み進めることで、論文や研究自体の信ぴょう性を明確な根拠をもって判断することができ、そのことが、自分が実際に臨床現場で働く上でとても重要なことなのだと認識させられました。一年を通して英語論文の要点を整理し、読み進める上でのプロセスを教えていただいたおかげで、自分の中で最初に持っていた英語論文に対する抵抗はかなり薄れたように思います。このレクチャーで学んだことは、医師として仕事をする上で大変価値のあることであり、研修医の時期にこういった考え方を教えていただけたことはとても貴重な経験となりました。

最後になりましたが、お忙しい中、当院まで来てくださった飯村傑先生、レクチャーを企画していただいた当院のスタッフの皆さまに感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2020.03.13　福井大学医学部附属病院　寺澤秀一先生

今回は、福井大学地域医療推進講座教授の寺澤秀一先生にお越しいただき、症例検討会を行いました。当院では毎年、だいたい５回ほど寺澤先生にお越しいただいております。研修医が実際に経験した症例をだいたい２例ほど提示し、寺澤先生の経験を交えて検討会を行なっています。

1例目は大動脈解離の症例でした。大動脈解離は、血管病変のリスクが高い高齢者に多いイメージですが、今回の症例は４０代と若く、難しい１例でした。大動脈解離の症例は造影CT検査で診断は可能ですが、胸部レントゲンや単純CT検査での着目点も教えていただきました。胸部レントゲン撮影は入院前にほぼ全例に撮影しています。寺澤先生は脳梗塞の患者など、大動脈解離による脳血流が低下してことによる発症を毎回除外しているとのことで、とても勉強になりました。

2例目は回転性めまいをと左上下肢の麻痺を主訴とした小脳硬塞の症例でした。めまいを主訴にして救急外来を受診する患者は多く、その大半は良性であり、耳からくる末梢性のめまいのことが多いです。しかし、たまに今回の症例のように小脳を病変とした、中枢性のめまいのこともあります。その時の診療の進め方や頭部CT検査の着眼点などをご教授していただき、大変勉強になりました。

毎回寺澤先生のレクチャーは実臨床での研修医がつまずきやすい点について教えていただき、大変有意義な時間です。最後になりましたが、今回レクチャーしていただいた寺澤先生、企画していただいた厚生連高岡病院の先生方にこの場をお借りして感謝を申し上げます。